

ごあいさつ

学校法人 村田学園理事長

村田 照子

学校法人村田学園は、ここに創立八十周年を迎えることができました。

創立者村田謙造が、ささやかな私塾『銀行会社事務員養成所』を、神田一ツ橋通町一丁目に開いたのは、明治四十二年、弱冠二十二歳の時でした。

国家の要も、企業の要も、一家庭の要にいたるまで、その基幹をなすところのものは、健全な計画された経理の処理であることに着目し、経理教育が国民常識として、普及されることを、終生の仕事として実践してまいりました。

村田簿記学校が「学校教育に類似するもの」という位置の各種学校に甘んじ、むしろ誇りを持ちながら、実務に役立つわかりやすい簿記教育を工夫し、また、「四つ珠ッロバン」の普及に全国を馳せ、自ら教壇に立って直接生徒を指導することを、至上の楽しみとしていました。

一方、経理教育と、女性の社会進出の今日あることを先見し、『村田女子計理学校』を創設したのが昭和六年。「女子の特性の開発」「社会に役立つ女性の育成」の目標をかかげてのスタートでした。今日『村田女子商業高等学校』として、創立の趣旨を生かしつつ躍進をとげております。

関東大震災、戦災によるすべての校舎の焼失など、幾度か零からの出発を余儀なくされながら、健康な身体と、身体でおぼえた技術は、如何なる困難も克服し、己を援

けるものであることを信じ、学校の復興に全力をつくしてきました。

戦後の教育制度改革の中、やはり置き去りにされたままの各種学校が、実は実社会で各方面に就業している人々にとっては、最も知りたいことを学ばせているところであることを、公的に認めさせるべく、全国の同志の方々と手をたずさえての運動にも加わっていましたが、昭和五十一年の専修学校法成立を待たず、前年の五十年三月に八十八歳で没しました。経理教育一筋、六十六年間の足跡でした。

学園創立五十周年は昭和三十四年。ようやく戦後の復興が軌道に乗りはじめた時で、女子商業高校の校舎を木造から、現在の鉄筋校舎に改築すること、簿記学校現三号館の入手改装で精一杯でした。

六十周年は昭和四十四年。あたかも学園紛争で教育界の危機が叫ばれている真最中のことでした。共立講堂で行われた記念式典に、当時文部大臣であられた衆議院議員坂田道太氏は、警官の護衛の中を出席して下さって、日本の教育界をささえる私学への期待を切々と訴えられたことを、鮮明に記憶しております。

自ら教壇に立ち、実践を通して導くことを本領としてきた村田謙造は、書物にしたためて残したものがありませんでした。私共、創立者の警咳に接した者は、私立学校の基本である創立の理念を後世に伝える責務を痛感しております。

本年八十周年を迎えるにあたり、何をなすべきかを考えました時、まず想到したことは、一人でも多くの方々に、村田謙造を語っていただくことでした。また同時に、苦難の時代を生き抜いた学園の姿も、いま、記録に残しておかねばと思いました。

「技術を習得しようとする者、技術を授けんとする者は、とかく、その技術の習熟のみに走りがちである。しかし、特に経理の道につかんとする者は、人格・人柄が大切だ。公私の別をわきまえ、自らにきびしく、節約・奉仕の心で身を処すべきである」とは、常々聞かされてきた事柄でした。

今日、未曾有の経済面での発展を遂げてきた日本。教育こそが国家百年の計の基本であると叫ばれつづけられている一方で、まことの日本人の心を希求し、さまようている若者の姿も見聞いたします。十年後には、二十一世紀の扉が開かれるのです。

与謝野鉄幹が「簿記の筆とる若者に、まことの男の子 君を見る」と人を恋うる歌の中に詠み込んだ時代、創立者は時代の先端を行く簿記教育に身を投じてゆきました。世界の経営が、国の経営が、一企業の経営が、人の道としての根本から問いなおされている時代、新産業革命の急進する中であって、教育の場も、技術も、日々更新され拡大されて行っております。

我が村田学園の百年の計に思いを馳せるなら、不易なるものは「たゆまぬ努力により自己の技能を充実させること」、「如何なる情勢の変化の中でも、最後に真価を発揮するのは、己の人格であること」を、学園で学ぶ若き学徒に熟知・体得させ、一方教授陣は、時代の変革を果敢に受け入れて、常に経理教育の先達としての役割を担ってゆくことであると考えます。

一私学が、創設から時を経て発展してゆく過程では、ある時期において卓越した強力な指導者によって伸長してゆくものですが、やがてその指導者の意思が同志である教職員に受け入れられ、工夫されて広がりをもせた時に、その時代に生き生きとした次の発展を遂げてゆくものと思います。「温故知新」の言葉に即して、八十年の歩みを尋ねた私共学園関係者一同は、新しい出発を誓ってスタートを切ります。

ここに、八十周年に際し学園を代表いたしました、今日までお寄せ下さいました、関係各位のご厚情を深謝いたしますと共に、新たなはばたきに燃える本学園への一層のご指導・ご支援を賜りたく切にお願い申し上げます。

終りに、「八十周年記念誌」編纂にあたり、玉稿を賜り、また史料等を提供して下さいました皆様に、厚く御礼を申し上げてご挨拶と致します。